

radical chic

既に茶番劇の機能すら失った自民党政治の
舞台崩壊の最後の一押しを可能にする今秋
階級闘争の戦術点をこそ鋭く見出し、全人
民のあらゆる政治的展開口を指し示そう！

世界的な政治の構境変動期を掴み取り、そこに
ある共産主義運動の潮流形成に邁進しよう！

安倍政治の尻ぬぐいに終始した
岸田政権

十月一日、石破茂が安倍路線
の継承を掲げる高市を破り自民
党総裁選を制し、日本の総理大
臣に指名された。総裁選前から
アジア版NATO推進を日米地
位協定の見直しや自衛隊グアム
駐留などの奇策と共に打ち出し
たものの所信表明ではそれらに
言及せず、「信頼回復」を強調
し従来政策路線の踏襲に終始し
た。これまでの岸田政権の失政
を糊塗するにはまるで足りず、
何もできない石破政権への失望
が早くも巷に広がっている。
ふり返ると支持率最低に追い

込まれ退陣した岸田政権はこの
三年間で、いわば安倍政治の継
承とその尻ぬぐいに終始した。

旧統一教会との癒着問題、裏金
問題、そして物価高騰への対応
などによって国民から不信任を
買うこととなり、支持率が昨年
秋から二〇%台で低迷、不支持
率はその倍以上の五〇〜六〇%
台から下がらず、実質的に退陣
に追い込まれることになった。

旧統一教会問題に対しては、
一応は党内で「調査」を行い、
今後は関係を断つと言いながら
も、本丸である安倍元首相の調
査は行わず、「関係を持ったこ
とはなかった」と答えた議員が
嘘であったことが次々に明るみ

になるなど、首相自身の発言が
まったく信用できないことだけ
が伝わってしまった。結局、自
民党は旧統一教会の存在なくし
ては選挙に勝てず、つまり政権
の獲得と維持はできなかったと
いうことだけを強く印象に残す
ことになった。

裏金問題に対しても、岸田前
首相は「火の玉となって取り組
む」と表明しながら安倍派など
三九人を処分したものの、自ら
を処分対象から外し党内外から
批判を浴びた。この問題に対し
ても形だけの党の調査を行った
が、裏金作りの経緯や使途の詳
細については明らかにならな
かった。国民の最大の関心事に
ついて詳らかにすることを避け
ていては何を言っても説得力は
ない。だが、これ以上問題に拘
泥することは自民党の存続に関

わることになるから詳らかにで
きないのだ。裏金作りも含めた
金権政治そのものが自民党の本
質なのだ。派手な自民党総裁選
を何度繰り返してもこのことは
変わらない。自民党議員が自民
党に集うのは、まさにそこにカ
ネが集まるから、それだけであ
る。集金能力が失われれば、自
民党は途端に崩壊の憂き目にあ
うだろう。仮に何らかの政治信
条があるとすれば、結党からの
党是である「改憲」だけである。
だから「改憲」という言葉を繰
り返さなければならぬのだ。

アベノミクスから脱却できず

岸田政権自体は何ら独自色を
示せずに幕を閉じることになっ
た。政権発足当初は独自色を示
そうとし、安全保障や原発など

の重要政策を熟議を経ずに国民の反対を押し切ってきた安倍政権に対し「聞く力」を強調していた。経済政策に関しても「アベノミクス」から距離を置き、格差を広げた新自由主義的な政策の転換を目指してはいた。そして「成長と分配の好循環を実現する」という「新しい資本主義」を掲げ、金融所得への課税強化も打ち出したが、株価が急降下すると、岸田は早々に方針を転換した。一年もたたない間に、個人による投資に頼る「資産所得倍増プラン」に修正したのである。

この間「史上最大」と言われる株価の乱高下が続いたが、そうであっても実体経済に何ら変動がないのは、株価が経済状況を押し量る実質的な指標として、はもはや意味をなしていないからだ。グローバルゼーションが進む中で富裕層に大量に流れ込んで無駄に貯め込まれたカネが見出した行き先が株式市場であるにすぎないからだ。

実際、投資に頼る経済政策を進めても、この三年間で実質賃金がマイナスを免れたのは七カ月のみで、今年六月にプラスに転じるまで、過去最高となる二六カ月連続でマイナスが続い

た。結局賃上げに有効な政策を打ち出せないまま、円安に伴うガソリン価格や電気・ガスに対する補助、あるいは定額減税など政権浮上を狙ったその場しのぎのバラマキだけだった。

この間国民は円安による物価高騰に苦しめられたが、これも安倍政治の負の遺産によって引き起こされた事態である。円安は日本と欧米との金利差によるところが大きい。安倍政権時代から続けられてきた大規模な金融緩和と財政支出の財源を借金に依存していることが、金利を上げられない事態を生じさせた。庶民レベルでは住宅ローンの返済に影響を与えるというところもあるが、アベノミクス以来続けられてきた日銀が国債を買い支えて財政支出を増やすという手法が、国債の利払いだけでも年間で十一兆円近くに達しており、わずかな利上げだけでも国家予算を圧迫する。結果的に物価高は続き、経済を好循環に向かわせることができず、岸田政権はこの経済状況の中で出口を見いだせないまま、国民から不評を買うことになってしまった。

「新しい資本主義」という岸田の触れ込みであったが、ナン

シー・フレージャーが言うように、資本主義社会では「資本主義」自体は「自然」となっている以上、通常ことさらにこの言葉が使われることはない。「資本主義」という言葉が使われる事態が、まさに資本主義が危機に直面していることを物語っている。

強化される軍事情体

岸田前首相が自らの「功績」として強調するのが、「防衛力の抜本的強化」であった。岸田政権は、他国を武力で守る集団的自衛権行使の容認を含む安全保障関連法を成立させた安倍政権の路線を発展させ、安保関連法の保有を推し進め、二〇二七年の防衛費の総額を従来の一・六倍である四三兆円に増額させた。さらには武器の輸出ルールを緩和し、歴代政権が原則禁じてきた殺傷能力のある武器の輸出も容認し、英国やイタリアと共同開発する次期戦闘機の第三国輸出を可能にするなど、安倍政権を超える軍事強化を実現した。

八月に示された防衛省の二〇二五年度予算の概算要求

は、過去最大の八兆五三九億円となり、専守防衛との矛盾が指摘される敵基地攻撃能力（反撃能力）に使用可能なミサイルや攻撃型ドローンの取得費なども計上されている。

敵基地攻撃能力の関連費用には、多数の人工衛星で目標を探知・追尾し、攻撃の精度を高める衛星コンステレーションの費用、他国に届く複数の長距離ミサイルの取得費、ミサイル配備に必要な火薬庫の増設費用などが組み込まれる。

三十億円かけて調達する予定の攻撃型ドローンは、自ら標的にぶつかって攻撃する「自爆型」が想定されているが、将来的には人を介さず兵器が敵を峻別し、攻撃することができるとAIの搭載も検討されている。

防衛予算は高額な兵器を分割払いで購入し、複数年度に渡るものもあり、要求額のうち四兆円強がこうした「兵器ローン」の返済が占める。二五年度当初予算には、金額を明示せずに「事項要求」とした米軍再編の関連費が加わる。

八月二〇日、防衛省は、名護市辺野古大浦湾側で、米軍基地建設のための埋め立てに向け新たな護岸整備のためのくい打ち

工事を始めた。前例のない、海底の軟弱地盤の改良は難工事となることが予想されている。マヨネーズ状の地盤に軍事基地を建設するとすれば、工期が大幅に遅れ、完成することは不可能かもしれない。たとえ完成したとしても軍事基地として使用するには、あまりに脆弱なものとなってしまう可能性がある。実際、約二七四〇メートルある普天間基地の滑走路に対し、辺野古新基地は約一八〇〇メートルと短く、使い勝手が悪いとされている。在沖繩米軍幹部の中にも、「最悪のシナリオだ」と言う者もあり、移設後には嘉手納基地部隊の運用を補完する可能性があるなどとも言われている。

こうしたことを裏付けるかのように、日本政府は二〇〇億円以上をかけて普天間基地の補修工事を既に進めている。補修は米側からの要請で、防衛省は「必要最小限の補修」と説明するが、億単位の契約や、完成まで数年がかりの大規模な工事もある。当初の計画では五施設だったが、十六年になって十九施設が追加された。辺野古新基地は普天間基地の代替施設として建設が進められ、「世界一危

「唯一の解決策」としての米国民のための大統領になる」と述べ、「中間層の強化が大統領としての決定的な目標だ。それが中間層の家庭に生まれた私の思いだ」と強調した。

移民問題と外交に「弱点」があると言われるハリスは、共和党が反対する国境管理を厳格化する法律の整備を約束し、経験不足を指摘されている外交・安全保障では、中国とロシアに毅然と立ち向かう姿勢を強調し、バイデンの国際協調路線を踏襲し、同盟国との関係を重視、若者から批判を浴びている中東政策では、イスラエルの自衛権支持を明確にしつつも、パレスチナ自治区ガザの人道危機を止めるために停戦合意を進めることを表明した。これは従来の米国の外交政策を基本的に踏襲したにすぎないが、しかしこれはトランプとは真つ向から対立する政策である。

米国大統領選
——ラストベルトの争奪戦

バイデン大統領の米国大統領選からの撤退後、民主党の後継指名を受けたハリス副大統領は、副大統領候補にミネソタ州のワルツ知事を選んだ。ワルツ知事は人工中絶の権利を保障する州法の成立や学校給食の無償化など、リベラル寄り中間層重視の政策を実施した。ワルツ副大統領候補に求められているのは、トランプ前大統領が強いとされる地方の労働者の票を取り込むことである。

ハリスは民主党大会の指名受諾演説の中で、「この選挙は過去の分断をのりこえ、新たな道

を切り開く機会だ」「私はすべての米国民のための大統領になる」と述べ、「中間層の強化が大統領としての決定的な目標だ。それが中間層の家庭に生まれた私の思いだ」と強調した。

移民問題と外交に「弱点」があると言われるハリスは、共和党が反対する国境管理を厳格化する法律の整備を約束し、経験不足を指摘されている外交・安全保障では、中国とロシアに毅然と立ち向かう姿勢を強調し、バイデンの国際協調路線を踏襲し、同盟国との関係を重視、若者から批判を浴びている中東政策では、イスラエルの自衛権支持を明確にしつつも、パレスチナ自治区ガザの人道危機を止めるために停戦合意を進めることを表明した。これは従来の米国の外交政策を基本的に踏襲したにすぎないが、しかしこれはトランプとは真つ向から対立する政策である。

「両陣営の間ではラストベルトの争奪戦となっている。ペンシルベニア、アリゾナ、ジョージアなど七つの激戦州は選挙ごとに結果が変わり、そこでどれだけの選挙人を獲得できるかが勝敗の鍵となる。現在、日本製鉄による米鉄鋼大手USスチール

の買収計画があるが、両者ともこれに反対を表明し、買収に不安を覚える鉄鋼労働者の側に立つ姿勢を強調する。

九月十日、トランプとハリスは初のテレビ討論会に臨んだ。ハリスは「中間層や労働者を引き上げる計画を持っているのは私だけ」と主張し、人工妊娠中絶の権利や議会襲撃事件をめぐってトランプを追求、トランプは「彼女にはプランがない」と応酬したが、守勢に立たされた。印象に残るのは、不法移民対策に関してトランプは「移民が住民のペットや猫を食べている」とこれまた荒唐無稽な発言をし、司会者に証拠はないとたしなめられた場面だ。これに對してトランプが「テレビで見た」と反論する。およそ大統領候補者とは思えない幼稚さだが、しかしトランプはこれでいいのだ。支持者たちはこのようなトランプが好きなのだ。「自分と同じだ」と親近感を持ってしま

うからだ。こうした民衆たちが米国大統領を決め、その米国が世界の未来を決める。

銃撃事件をきっかけにして優勢に立ったトランプであったが、その後ハリスの登場によって拮抗状態となり、ややハリス

がリードする事態となったそのさなか、再びトランプに対する暗殺未遂事件が起こった。犯人の動機は曖昧であるが、何しろ気に食わないから殺すという、安易な暴力への依存は、しかしトランプ自身が加速化した米国社会の現状である。

新たな局面を迎えたイスラエル—パレスチナ戦争

ハマス指導者と新イラン民兵組織ヒズボラ最高幹部の司令官がイスラエルによって暗殺された。中東に緊張が走った。八月時点でガザ地区の死者は四万人を超えている。ヒズボラは報復として、イスラエルヘルロケット弾三二〇発以上を発射し、これに先立ちイスラエル軍はヒズボラの攻撃を察知し、約一〇〇機の戦闘機で拠点四〇カ所を先制攻撃、ヒズボラからのミサイルの大半を迎撃したと言われる。

それ以前から米国など三ヶ国が仲介する停戦交渉が行われてきており、ガザとエジプト境界でのイスラエル軍駐留が争点となり、ハマスのパレスチナは完全撤収を要求、イスラエルはこれを拒否し、膠着状態に陥った。イスラエルのネタニヤフ首

相がかたくなのは、連立を組む極右勢力への配慮と自らの政権維持のためだ。

九月二日には人質だった六人の遺体がガザで発見されたことを受けて、拘束されている人質の早期救出を求め、停戦合意の早期妥結を訴える大規模なゼネストがイスラエルで行われ、交通・金融・教育・自治体などが一時機能を停止し、テルアビブでは五十五万人による大規模なデモが行われた。しかしそれでもネタニヤフは引かない。その後、ポリオ・ワクチン接種活動のため一時戦闘は休止した。

ガザを破壊尽くし、多くの命を奪ったこの戦争は新たな局面に入った。ヒズボラ戦闘員らが使うロケベル型の小型通信機が一斉に爆発し、子供二人を含む十二人が死亡した。負傷者は二八〇〇人、ヒズボラはイスラエルの攻撃と断定し、報復を宣言した。イスラエルは関与を肯定も否定もしていない。さらに翌日、今度はトランシーバーが相次ぎ爆発、二五人が死亡し、約六〇〇人が負傷した。これと機を一にして、ガザに配備されていたイスラエル軍の師団が北部に移動、イスラエルのガラン国防相は「戦闘の重点が北部

に移っている。新たな局面を迎えつつある」と述べた。イスラエルとレバノンの国境地帯が急激に緊迫化する。イスラエル軍はレバノンの首都ベイルート南部郊外を空爆した。戦争が拡大する。

未来の社会像の構築へ

こうした事態が続くのは欧米諸国政府のイスラエルに対する不徹底な態度、いや支援・支持に原因する。ハリスも戦争停止を訴える米国内の若者たちのこ

これは一時期右派ポピュリズム象」は米国内で生き続けている。明らかなように、「トランプ現象」は米国内で生き続けている。これは一時期右派ポピュリズム

が席捲したヨーロッパにおいても同じである。英国では殺人事件の容疑者が不法移民だとする偽情報が発見され、それを信じ込んだ民衆が「移民を追い出せ」と叫びながら暴動を起した。フランス下院選挙では極右政党「国民連合」が多くの票を集め、ドイツ東部の州議会選挙では極右政党「ドイツのた

ある。地域は解体され、孤立化し、貧困と不安定な生活に叩き込まれた労働者たちが、唯一すがれると思えるものが国家・国民・民族であったということ、そこにしか自らの所属を確認できなかつたのである。自分たちから全てを奪った現在の資本主義とそれを牛耳るエスタブリッシュメントに対する憎しみが、現在世界中で勢力を伸ばす右派ポピュリズムの原動力である。トランプらはそうした彼ら・彼

めている。(幾瀬二弘)

川満信一追悼・上

〈反復帰〉の奔流を創って

大杉莫

「詩人で沖縄の自立と共生の思想を追い求め、沖縄の戦後思想に足跡を残した川満信一さんが六月二十九日、九二歳で死去した」(沖縄タイムス 20240710)のリードを付けて、仲里効によって、川満信一の類まれな「闊達と諧謔」を、

「鷹揚と風刺」として抉り出し、彼が時代に与えた影響を鮮やかに描き切った追悼文(「思想のハジチうたれた／残した痕跡たどり直す」(上)タイムス 20240710、「沖縄という重力に抗った思想／根を問う草莽の思想家」(下)同 20240711)

が出され、その他、多くの論者によって「川満追悼」がなされている。それ故「川満信一追悼」の一文として、このような拙文が論点整理としてではあれ、その果たしうる射程に關しては心許ないが、しかし、沖縄

文化と思想の総合誌

新沖縄文学

特集 琉球共和国へのかけ橋

平恒文 / 本崎甲子郎 / 宇井純 / 阿部伊都子 / 池田大吉 / 中野好夫 / 森崎和江 / 松本謙一 / 大岡雅常 / 安里清徳 / 井上清 / 森在孝 / 牧港篤三 / 平良良昭 / 金城朝夫 / 他

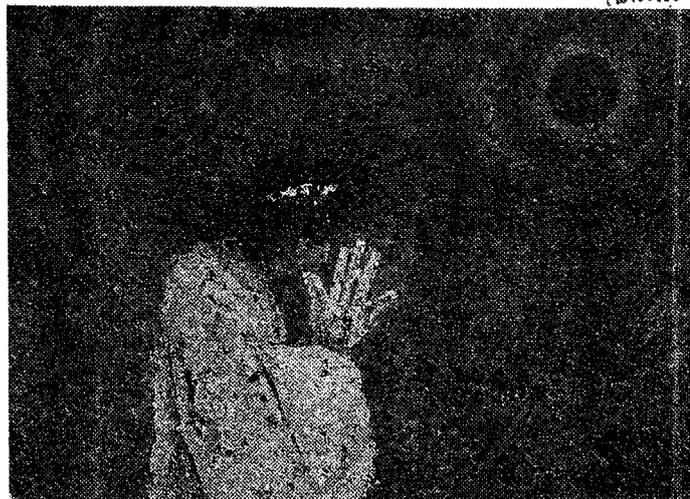
琉球「共和国」「共和社会」憲法草案(二案)

編者 海はしる

仲若直子

48

1981.6.30



の〈未来〉、それはとりもなおさず、日本の、そして世界の〈自立解放〉に向けた、試みの「つぶやき」として、お許し願いたい。

論点整理が必要だと思わせたきっかけは、まぎれもなく川満信一が投げかけた。川満信一〈共和「社会」と「国家」の相違〉——新川明氏の批判への応答である。その〈①〉は『未来・春』No.611／未来社2023、〈②〉は『未来・夏』No.612／同2023に連載されている。

まず「川満の巧妙な嘘っぱちは看過できない」と語る新川明の〈『琉球共和国』夢譚』再論〉『琉球共和国憲法の喚起力』未来社20220515所収での批判（『非難』）に対する川満の応答である。

新川は書く。〈期待通りの（仲宗根私案）「草案」を得て安堵したのも束の間、川満信一の異議の結果、川満にも独自案を求めて両案併載で決着をみたのが事実の経過である。〉と。

自らの「編集企画」を覆し、あまつさえ、それを「手柄話」のように語る川満への、新川の「遺恨」も含め、「特集 琉球共和国」が（私）新川に代わって、新任編集責任者の川満によって、「特集 琉球共和国へのかけ橋」となったことへの「非難」は、この『新沖縄文学』一九八一年六月号に掲載された川満信一と仲宗根勇の二本の「私（試）案」への「価値」をいささかも減ずることはない。

否、それどころか四〇年以上も縁となっただけでなく、当時も仲宗根勇「共和国憲法」と川満信一「共和社会憲法」が併記されることよって、〈未来〉への深さも、そして広がりも生まれたと思つたのは評者だけであるまい。もつとも、川満信一・仲里効編『琉球共和社会憲法の潜勢力／群島・アジア・越境の思想』未来社2014と『琉球共和国憲法の喚起力』2022として、かつての二つの「憲法私案」を二冊の単行本として改めて世に押し出した仲里効の「仕事」は何よりも増して称賛されるべきだと愚考するが。

しかし、問題は、新川の川満批判（『非難』）に対する、川満信一の「反論」がさし示す、一九七二年併合（『復帰』）に対する「反復帰論」の今日的「総括」と、今後の「琉球独立」の方途、展望に関する沖縄の「自立解放」をめぐる問題提起をめぐってではなかるうか。

さて、川満は前掲の『未来・春』で「以上のような事務的記憶違いの修正ならあやまって済むことだが」と書き出し、『反国家の兇区』の著者「新川明！評者註」も、国民国家解体の秘かな願望を抱いているものと思つていたが、日本国家には反抗しても、近代国家一般の否認までには至っていないようだ」と、踏み込む。続けて「アナキストを自称してきた新川氏の思想はどうなっているのだろうか。『非国民の思想』的同伴者とみていたばかりの、思いの足りなさであったか。／川満は国家否認を持論とするのに対し、新川は国家容認のうえで『反国家』論

方途、展望に関する沖縄の「自立解放」をめぐる問題提起をめぐってではなかるうか。

文化と思想の総合誌

新沖縄文学

特集 沖縄にこだわる —— 独立論の系譜

沖縄人連盟／沖縄民主同盟／宮古社会党
琉球国民党／琉球独立党／ふたば会

詩 赤土の恋

与那覇 幹夫

53

1982.09.20



であり、国家の存在を前提にして、それに反発し抗議する主張であった」。この点では、評者も「反ヤマトの兇区」に傾いた新川より、仏教者の色濃いアナキスト川満に、不遜にも「親近感」を覚えたものである。特に新城郁夫と新川明の「論争」（※1）を振り返ると「ナシヨナリズムとアナキズム」という補助線を引いた時、新川と川満の立ち位置は明瞭であろう。

その上で川満は「ぼくが異議を申す機会を得たのは、当時、議論されていた自立と独立の思想的相違をはつきりさせたいという意図と、編集責任者という立場にあったからだ」と述べる。ここでは、前任編集責任者川満の意図を「無視」して、自分川満が編集責任者になったから、編集企画の「変更」を押し通した、と川満は正直に告白している。もつとも、当時の川満にすればこの「変更」は新川の主旨を踏み外すものでもなければ、まさか新川の「逆鱗に触れる」とは露にも思わなかつたろう。

「それで私案の基礎は、沖縄

「それで私案の基礎は、沖縄

戦体験に学ぶ絶対非戦と、自然と人間社会の共生、宇宙的如来倫理(仏教思想)の自覚を基本に置くことになった。……象徴旗(降参の白旗)をかか

て、戦意のないことを誇示したうえ(川満私案)「一三条」となっている。

なお、件の二本の憲法私案が掲載されているこの『新沖文』

四八号には、沖青同(沖繩青年同盟(※2))委員長だった金城朝夫が「小国寡民・夢のかけ橋/琉球共和国の可能性」という短いコラムを書いている。さらに川満は「沖繩経済の自立の構想」をまとめた『沖繩経済研究会』の原田誠司・安藤誠一・矢下徳治・我々も学ばせていただいたフエニックス社・当時の曙光派Ⅱらとの討論会も参考になった」と言及している。無謀を顧みず、面談を求め、沖繩講座発足前の、初めての沖繩で主催した「討論会」に、社会大衆党元書記長・比嘉良彦さんとともにメインゲストに川満さんをお招きしたのも、こうした機縁があったからこそであった。この会には、当時タイムスの編集局長をしていた由井晶子、それに仲里効が一聴衆として参加していた。もっとも、彼がかつて

の沖青同書記長とは、その時は全く知らなかった。

川満は、沖繩戦体験による「絶対非戦」は「不可避の集団死を免れる市民の知恵として〈負ける勇気〉が必要だと考えた。…〈負ける勇気〉の白旗を掲げるのである」として、「弱者の真面目なパロディとはそんなものだろう」と。そして「暴力革命のイメージから抜け出せず、国会以外の統治方法を夢見よう」とするのは思想的怠慢ではなからうか」と続ける(※3)。さらに彼は「(国家への思慕)」という畏にはまりこんだ復帰思想への反省であり、憲法私案を試みた動機であったと思っ

ている」と振り返る。

さて「私(試)案」を巡る『新沖文』誌上での「匿名座談会―『憲法』草案への視座」では、「単位社会におけるミクロな統治関係でも、支配と被支配の関係は解消できない」と岡本一恵徳。二〇〇六年没、七十一歳。「水軸の発想―沖繩の『共同体意識』について―」(『叢書わが沖繩』第六巻「沖繩の思想」1970所収)は食い下がっていた」と明らかにしているが、そ

れに對して川満は「個々人の自己変革が前提になる」としか応答していかないのが心残りと言え

ば心残りではある。ただ、今改めて読み返してみると川満は「これから私達が憲法をつくるとしたら、その基本は所有のあり方だと思えます」ときっぱり発言している。

「近代化と同化を考える―新川明氏の批判への応答②」に移る。

「一九五〇年代、沖繩の戦後情況の推移を体験するたびに、日本という親しい感覚、というよりも自身のよ

うな意識が剥がれ落ち、日本を相対化する意識が芽生えてきた」、「相対化とは、対象を押しや

るようにして、自己の思想的立ち位置を確かなものにするための手順である。しかし、人間の習慣的思考は、ある方向を示唆されると、歴史やら民俗学、怪しげな心理学やらを、手当たり次第にかき集めて、その考え方を正当化するための努力をする。彼はすでに「対日本、対アメリカはどれも外側との関係の問題で、そこでの被差別ばかり考えていたら、沖繩の思想は

足腰立たないよ」と(図書新聞3136号20131123)と警鐘を乱打していたのだ。(続く)

琉球共和社会憲法の潜勢力

群島・アジア・越境の思想

川満信一 仲里効 編

川満信一 仲里効 編

未来社

の起爆性において当の民族にさえ制御不可能な暴力となる」。同No.82/20140401で「沖繩への内在的批判抜きに沖繩の脱植民地化など絶対でない。新川氏はそれを知るべきである」と痛罵する。これは今年八月一〇日に開催された「沖繩は怒っているぞ ヤマトだって怒りなさいよ 東京集会」の「浅薄」というのも愚かしいスローガンにも通底していると思われる。なお、『けし風』は第120号202411発行をもって「休刊」となる。1993年の創刊以来、

愛読させていただいた。感謝しかない。ご苦勞様でした。

なお、鷺田清一が朝日新聞コラム「折々のことば」202406030で取り上げたことによつて知つたのだが、新城郁夫「沖繩の運動とか

思想のいいところは、逃亡を許す――変な言い方ですけど、逃亡者が集まっている感じがするんですね。……常に未来からよびかけられている者として、当事者になるというプロセスがある」(新城郁夫・鹿野政直『対談・沖繩を生きるということ』岩波現代全書2017)を付け加えておく。

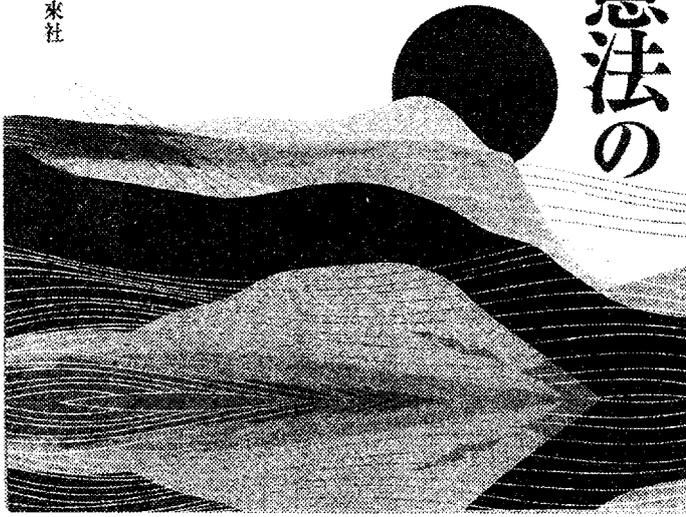
※2 二〇二三年一〇月一九日に琉球館より『沖繩青年同盟資料集―「復帰」に抗したへ在日沖繩青年運動』が刊行された。RC第五二号 20240328

琉球共和国憲法の喚起力

の起爆性において当の民族にさえ制御不可能な暴力となる」。同No.82/20140401で「沖繩への内在的批判抜きに沖繩の脱植民地化など絶対でない。新川氏はそれを知るべきである」と痛罵する。これは今年八月一〇日に開催された「沖繩は怒っているぞ ヤマトだって怒りなさいよ 東京集会」の「浅薄」というのも愚かしいスローガンにも通底していると思われる。なお、『けし風』は第120号202411発行をもって「休刊」となる。1993年の創刊以来、

仲宗根勇・仲里効 編

未来社



に「書評」掲載。

※3 川満は仲宗根私案を念頭に置いてか、「これから先もなお暴力革命によってしか改革が不可能だったら、累々たる屍の向こうの世界連邦政府ということになる。そんな政府を目指すより、ヌチドウタカラにはヘイモとはだし」の社会が良いのかもしれない」とも言う。時あたかも、沖繩戦を指揮した牛島満・日本軍司令官を自衛隊が那覇駐屯地で公然と顕彰していることも暴露されている。

【辺野古だより】

八・一〇県民大集会に二五〇〇人が結集!

八月一〇日(土)、「ユニオンですからドーム宜野湾」で《欠陥機オスプレイの飛行停止と普天間飛行場の閉鎖・返還》を求め「米兵の性犯罪と政府による事件隠蔽」を糾弾する八・一〇県民大集会が開かれた。主催は「第三次普天間米軍基地から爆音をなくす訴訟団」と「第四次嘉手納基地爆音差止訴訟原告団」「辺野古新基地を造らせないオール沖繩会議」の三団体。想定を超える二千五百人が結集し成功を収めた。

主催三団体の代表からはそれぞれ「米国の顔色をうかがい、県民を守らない日本政府は独立国家とはいえない」と非難し「今の状況を決して許してはいけない。私たちはこれからもずっと声を上げ続け、ならんしえーならん(駄目なことは駄目)間違いは間違いだとはつきり言い続けよう」と訴え、「未来ある子

どもたちのため、事件事故を起こさないためには、沖繩から基地をなくす以外ない」と呼びかけた。子育て世代を代表して、緑が丘保育園や普天間第二小学校の保護者らでつくる「キコドソラ」の与那城千恵美代表は、「米兵の性暴力事件に抗議しない大人に言いたい。見て見ぬふりをし、もしまた子どもたちが傷ついたらとき後悔しないか。無駄だと諦めることをみんなはやめよう」と訴えた。

玉城デニー知事も会場に駆けつけ、名護市辺野古の新基地建設に伴う設計変更をめくり、県の主張を退ける不当判決が確定したものの「われわれが抗う手段を取り上げられたわけではない」と力説。「全国、全世界に向かって沖繩の状況をしっかり伝え、われわれは決して諦めない」ということを強く主張している」と呼びかけると、会場から大きな拍手が起こり、しばらく鳴りやまず。県民大集会は最後にアピールを採択し、熱気あふれる中、終了した。(阿部貴之)

【映画評】

『パリのちいさなオーケストラ』

〜ガラスの天井を破った指揮者の物語〜

原題：Diverimento (2022)
監督・脚本：マリー＝カスティュー・マンシヨン＝シャル

映画の冒頭、古いテレビから流れるラヴェルの「ボレロ」。ベッドから起きてきて、ボレロを聴く父の隣に座り、片手で抱きしめられながら、静かにテレビを見つめる幼い少女。そこから全編を通して流れる音楽。クラシック音楽好きにはたまらない映画かもしれない。ただ、まるまる一曲聴けるのは、クライマックスに流れる「ボレロ」くらいで、あとは名作の断片のような演奏となるので、その点では不満が残る。サン＝サーンスの曲の演奏が多いのは、さすがフランス制作の映画だ。

映画は、指揮者を目指してパリの音楽院に通いながら、一九九八年に自前のオーケストラを立ち上げた少女の実話を基にしたという。原題は「divertimento」(ディヴェルティメント)、「少女の立ち上げたオーケストラの名前であり、イタリア語で明朗、快活な楽しい音楽などを指す言葉だそう。演奏される楽曲は必ずしも快活なものばかりではないが、主要キャスト以外はプロの音楽家を起用し、実際に演奏しながら撮影を

行ったという。ところで邦題は「パリの…」となっているが、ディヴェルティメント・オーケストラの地元はパリではない。パリの音楽院からも参加者がいるから、完全な間違いとは言えないが、地元はパリに隣接するセーヌ・サン・ドニ県スタン市だ。配給会社はフランス映画だから「パリ」とつけなければ売れると思ったのだろうが、少し安易な発想に思える。

アルジェリアからの移民の家に生まれ、双子の妹とともに、音楽好きの両親に育てられたザイアは、パリ郊外にある小さな音楽院でヴィオラを学んでいた。十七歳のある日、その才能を認められ、チェロを学ぶ妹とともにパリの名門音楽院に編入を認められる。ヴィオラ奏者ではなく、指揮者を目指す彼女だが、女性が指揮者を目指すことに、学校関係者の中にも拒否感を持つ者がいるなど、困難なスタートとなる。(描かれた時代はすでに一九九〇年代半ば)彼女は指揮棒を持っていないため手指で指揮を執るが、上流階級出身の

生徒たちから田舎者とかからかわれ、指揮棒の代わりにバゲット(フランスパン)を置かれるなどの嫌がらせを受ける。この辺の流れは、まるで滑稽味を抜いた「のためカンタービレ」を見ているようだ。そんな中、ザイアは学校の特別授業でベルリンフィルの首席指揮者を務めるなど、世界的指揮者であるセルジュ・チェリビダツケの前で指揮を披露し、その後直接指導を受けるようになる。チェリビダツケ本人は、映画の中でも現実でも「女性は指揮者に向いていない」と発言していたが、ザイアの音楽に才能を感じたようだ。厳しい指導を通じて、指揮者になりたいという思いを一層強くしたザイアは、音楽院の生徒の一部が彼女の指揮を拒否したことから、自前のオーケストラを立ち上げようと動き出す。

なんとか地元の音楽院とパリの音楽院の仲間とともに新しく作ったオーケストラで、コンサートに向けて精力的にサン＝サーンスの交響曲の練習に取り組みつつ、ザイアは並行して、指揮者のコンクールに出場する。しかし、自信をもって臨んだ予選を通過することはできなかった。音楽院のライバルである男子生徒は予選を通過し、ライバルとその取り巻きは、ますます彼女につらく当た

るようになる。すっかり自信を失った彼女は、授業にも、オーケストラの練習にも出ず、部屋に引きこもってしまう。すると彼女が来ないことを心配したオーケストラの仲間が続々とザイアの家の前の広場に集まり、まるでフラッシュモブのようにボレロの演奏を始める。音楽に励まされたザイアは部屋を出て、両親から贈られた指揮棒を振る。そこに町の人々が次々と集まりだし、楽しそうに演奏を聴き始める。

最後にテロップで世界の女性指揮者の割合は6%、フランスでは4%と流れる。日本での割合は不明だが、さらに少ないだろう。日本では音楽大学の卒業生の9割が女性だという。にもかかわらず日本のプロオーケストラの団員の五十二%が男性だそう。世界でも著名なオーケストラほど、団員に占める男性の割合が多い。一九八二年まで、ベルリンフィルの女性団員はゼロ、ウィーンフィルに至っては一九九六年までゼロ。ベルリンフィルの女性入

団拒否などをめぐり世界的な批判を受け、現在は両オーケストラとも女性団員を受け入れているが、なお男性が圧倒的に多い。女性は指揮にも、協働してオーケストラの音楽を作り出すことにも不得手だともいうのだろうか。

ともあれ、ザイア・ジウア二が立ち上げたディヴェルティメント・オーケストラは、現在でも七十人の団員を抱え、数多くのコンサートを行っているという。ついこのあいだ開催された二〇二四年パリ・オリンピックの閉会式では、ザイアは大会初の女性指揮者としてディヴェルティメント・オーケストラを率い、フランス国歌「ラ・マルセイーズ」を演奏したという。まあ、オリンピックはどうでもいいけれど、女性指揮者として保守的なクラシック界に風穴を開け、活躍しているのはいいことなのだろう。(あんづれら)

